

東京で望郷の念を抱いて暮らす

昭和四十年（一九六五）の春まだ浅い美和村鷺子（現在の常陸大宮市鷺子）の山すそにたたずみ、感慨に浸る老婦人がいた。矢島せい子（大学教授夫人で民俗学者、当時六十四歳）が百年の流れをさかのぼり、ようやく見つけた祖先の地だった。せい子は幼いころ、祖母の「とし」から聞いた数々の「とりのこばなし」が心の片隅に残っていた。としの実家の薄井家の前に三つ又道があり、人の通れない鳥の小道であるという「はと、からす、やまとりのこみち」があつたことなど。けれども、としはこの懐かしい故郷を追われた身であり、再び故郷を見ることなく、望郷の念を抱いたまま没した。

せい子は、かわいがつてくれた祖母の故郷を、幼い日に聞いた話の記憶を頼りになんとか訪ねたいと思ったが、所在地がはつきりしなかった。ところが昭和三十九年になつて、五万分の一の地図で調べたところ、「とりのこばなし」の「とりのこ」が美和村鷺子であることがわかり、念願かなつて祖先の地に立つことができた。

以上の話を補足すると、「はと、からす、やまとりのこみち」は、鷺子に実在の道標「はどうからすやまとりのこみち」のこと。全部濁点省略のひらがなのうえ読点がないため、た旅人が「鳩、鶴、鳥、山鳥の小道」と勘違いし、人は通れない道とあきらめて引き返した、という話が伝わっている。実際は「馬頭、鳥山、鷺子道」であった。

ところで話に出て来る祖母は、鷺子の郷士・薄井友衛門（六代友衛門）の次女である。「美和村史」によると、薄井友衛門家は江戸時代中期、この地方特産の和紙の問屋となり、さらに砂金業を営んで富豪となつた。水戸藩に大金を献金して郷士の身分を、それも一族の三人もが郷士の身分を得ている。さらに結城寅寿、市川三左衛門ら門閥派と密接な関係を持ち、彼らの大パトロンであつた。幕末には一族の中から諸生派、門閥派の一員として戦闘に参加した者もいる。

明治初年には諸生派処分の対象となるが、六代友衛門は徳川慶喜に従つて静岡に行き、同所で死亡。その子の七代友衛門は免罪後、分家に寄寓し、明治十八年（一八八五）に同家で没しており、これで友衛門家の直径は絶えたといふ。

では、先の話の薄井友衛門の次女としは、どうなつたか。戊辰戦争のころはすでに嫁いでおり、東京の現在の墨田区内で酒屋を営む婚家の加藤家で暮らしていた。諸生派に対する迫害や薄井一族の大変な状況は当然承知していたはずで、故郷を訪ねるなどということはもちろんできず、薄井家の出であることを秘しての生活であつたろう。そんな中、孫を相手の「とりのこばなし」が、もっぱら老後の楽しみだつたに違いない。

「茨城の明治百年」によれば、としの婚家・加藤家の酒屋業は明治時代、没落の道をたどる。としの長男・伝太郎は、河竹黙阿弥に弟子入りして竹柴伝蔵と名乗つて歌舞伎狂言作者となる。伝太郎の長女が前述の矢島せい子だが、せい子のほかは、長男が沢村国太郎、次女は沢村貞子、次男が加東大介、そして国太郎の長男が長門裕之、次男が津川雅彦、と芸能一族が誕生する。